

今江祥智
の本
第13卷

童話集

理論社

今江祥智
の本
第13卷

童話集二

理論社

今江祥智の本第13巻

一九八〇年五月初版

一九八八年五月第五刷

著者 今江祥智◎

発行 株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五―六

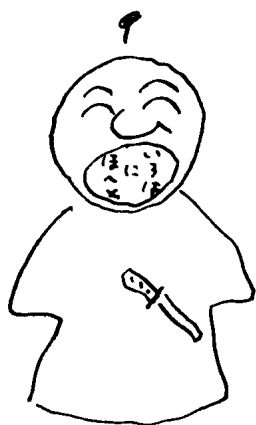
電話 営業〇三(二〇三) 五七九一

出版〇三(二〇三) 五七九四

編集〇三(二〇三) 二五七七

振替 東京九―九五七三六

落丁・乱丁本はお取り替えます



童話集二

いろはにはへと 7

きえたとのさま 15

青いてんぐ 57

石の町 61

おれはオニだぞ 68

風まかせ 78

神さまによろしく 82

紙人形 88

すみれの花さくころ 92

とのさまはくいしんぼう 98

ほうき 102

ぼうしのかぶりかた 107

とおくへいきたい 115

小さな花 127

下町の太陽 13

いつでもゆめを 144

ざびたナイフ 157

星はなんでもしっている 175

港が見える丘 193

花はどこへいった 205

黒い花びら 216

あとがき 253

解説 田島征三 255

編集委員 上野瞭

長新太

灰谷健次郎

装 幀 平野甲賀

装 画 長新太

制 作 小宮山量平

発 行 山村光司

編集担当 日比野茂樹

本 文 加藤文明社

表 紙 ダイニツク

カバ ー トライ印刷

製 本 誠製本

用 紙 十条製紙／日興紙業

今江祥智の本
第13卷

童話集二

いろはにほへと

すこしむかし、まださむらいがたくさんいたころのはなしです。

その日、かっちゃんは、はじめてもじをならいました。

いろはにほへと

の七つです。よむこともできます。かくこともできます。かっちゃんは、うれしくて、うれしくて、いろはにほへと、いろはにほへと……をくりかえしながら、みちをあるいていました。わすれないように、いろはにほへと、いろはにほへと……。

すると、そこで、どんと、なにかにぶつかって、つきとばされました。

— いたいよう、らんぼうだなあ！

しりもちをついて、べそをかきながらにらむと、目のまえに、さむらいがこわいかおをしてたっていました。

—こぞう、まえをみてあるけ。

かつちゃんは、まけずにいいかえしてやりました。

—だって、いろはにほへとおぼえたところなんだよう。いっしょうけんめい、おぼえながらある
いていたんだい。

さむらいは、ひょうしぬけしたみたいに、はっはっはっ、とわらっていつてしまいました。

（ふん、いろはにほへと、とな。かわいいもんだ。いろはにほへと、とな……）

さむらいは、おもわずそうくりかえしながらあるいてると、まがりかどで、でんと、なにかに
ぶつかりました。

—こ、これはしつれい……。

あわてておじぎをしましたが、あいてはなにもいいません。

そっとかおをあげると——目のまえに、ながいうまのかおがありました。

（わしとしたことが、あわててしもうて……）

さむらいは、あわててうまにおじぎをしてしまったことがくやくして、したうちをしました。
すると、うまの上のほうからこえがしました。

—これはこれは、八木五平どの。いかがいたされたな。

みあげると、ごころうが、うまの上でわらっていました。

さむらい八木五平は、すっかりあわててしまい、

—はっ、これはどうも。いや、なに、つい、いろはにほへとのことをかんがえておりましたもので……。

—ほほう、いろはにほへとのせいとな。これはおもしろい。

ごころうは、八木五平がてれかくしにそんなことをいったものとおもいましたが、いろはにほへとのせいとは、おもしろいぞ……。はっはっはっ、とわらって、いってしまいました。

*

さて、ごころうはおしろにつきましたが、どうしてか、さっきのいろはにほへとのせいが、わすれられません。

（いろはにほへとのせいかな。これはおもしろい。いろはにほへと、いろはにほへと……）

いいながら、つい、ちょうしにのつてとことこあるいていて、どしんと、なにかにぶつかってしまいました。

—ぶ、ぶれいもの！

すばやく、いっぽさがってみがまえて、さあ、まえをみると——そこには、のっぺりしたかべがあるばかり。

ごころうは、すっかりきまりがわるくなってしまうて、

—へっへ……。

と、わらってしまいました。そのわらいごえがおわらぬうちに、

—あっはっはっは……。

たかわらいするものがいます。

(ぶ、ぶれいな！)

きつとなつてふりむくと、なんと、そこにたつてわらっているのは、とのさまでした。

それでは、おこるわけにもいきません。しぶいかおになるのを、とのさまは、まだわらいつづけながら、

—あはは……じい、うふふ……いかがいたしたのじゃ。

と、たずねました。

ごころうは、すっかりれてしまつて、かえるみたいにならずに、口のなかで、
(いろはにほへのせいのせいでござりまするわ)

と、ぼやきました。

—なに？ はっきりともうせ。

ごころうは、ええい、もうどうでもよいわいとおもひ、はじめてもじをならったときのかっちゃんみたいにおおごえで、

—いろはにほへと、のせいのせいでござりまする！
と、どなりました。

—なに、いろはにほへとだと。これはおもしろい。いろはにほへと、のせいで、じいがかべにぶつかったか。あっぱは……。

とのさまは、またたかわらいをしながら、むこうのへやへいってしまいました。

*

むこうのへやでは、となりのくからやってきた、つかいのさむらいが、まっていました。

—これはこれは、とのでござりまするか。

そのさむらいは、ていねいにいって、ゆっくりとかおをあげました。

のっぺりしたひろいかおでした。そのかおをみると、とのさまは、のっぺりしたかべをおもいだしました。それから、そののっぺりしたかべにぶつかったさっきのじいのあわてぶりをおもいだして、おもわず、にこにこしてしまいました。

となりのくからやってきた、つかいのさむらいは、そんなとのさまのかおをみて、ほっといきをつき、

—さて、れいのみずうみの水のことではござりまするが……。

と、ようけんをはなしはじめました。あんしんしたせいか、ゆっくりと、ていねいにせつめいで

きました。

とのさまのくにと、となりのくにのまんなかに、大きなみずうみがあります。その水を、ことしもはんぶんずつわけて、おたがいのくにの田にひきたい、というのでした。

これまでは、いつもこのことで、ごたごたがありました。どちらもしぶってしまいうのです。くにざかいでは、いつも、ひやくしょうたちが、あらそいました。まいとし、すこしずつ、わるくなり、おとしは、おたがいのくから、さむらいがでて、しずめました。きょねんは、そのさむらいどうしのきりあいまでありました。このぶんでゆけば、ことしは、もしかするといくさになるかもしれないませんでした。

それで、のっぺりしたかおのつかいのさむらいは、しぶいかおでまっていたのです。それが、とのさまがすわるなり、にこにこしたものですから、ほっとして、ゆっくりとせつめいができました。ゆっくりときけば、ちゃんとわかることでした。とのさまは、よいよい、そのようにいたそう、というふうに、大きくうなずきました。

のっぺりしたかおのつかいのさむらいは、大きなためいきについて、かおをほころばせました。
—ありがたきしだい……。

すると、のっぺりしたかおが、よけいにのっぺりしてみえました。そのかおをみると、とのさまはいっそうはつきりと、かべのことをおもいだし、じいのことをおもいおこして、

—あっはっはっは……。

と、おおわらいしてしまいました。

のっぺりしたかおのさむらいも、すっかりうれしくなって、はっはっは……と、わらいました。いくさはさけられました。さむらいは、いそいそと、となりのくにへかえっていききました。

*

とのさまは、へやにもどって、おくがたにいままでのことをはなしました。

—とにかく、のっぺりしたかおでな。かべをおもいだしたわ。すると、じいのことをおもいだしてな。それはおかしかったぞ。

そして、もういちど、

—あっはっはっは！

と、たかわらいされました。とのさまは、じょうきげんでした。

おくがたのほうは、いくさがさけられたので、ほっとしました。そして、これも、もとはといえ、いろはにほへのせいだとおもうと、いろはにほへとがありがたく、いろはにほへと、いろはにほへととくりかえして、ほっほっほ……と、口をおさえてわらいました。

それから小さなむすめをよんで、

—さあ、いろはにほへと、をかいてごらん。ていねいにかくのよ。

と、いいました。

おひめさまは、たつぷりとふでにすみをふくませて、

いろはにほへと

と、かきました。

おひめさまはまだ四つでしたから、だいぶへんてこりんないろはにほへとなりました。けれど

も、おくがたには、こんなにつくしいもじがないようにおもえました。

ゆうぐれがしずかにおしろをつつみ、きょうもおだやかな一日でした。